



いながき

12月消防議会活動報告

隠ぺい 消防魂を傷つける ～知らないふりは限界に～



いとう

12月19日。吉川・松伏消防組合議会が開かれた。今回は17億円余の25年度決算の認定が主要議案。議案質疑に先立ってまず一般質問。「救急・救命士暴行事件」について、7月の「会議録」を手にトップの指示による組織的隠ぺい工作ではないか。と一時間にわたって追及した。

消防組合管理者の市長は短く「私は(警察からの)取り下げは指示していない」との答弁を繰り返しました。知らないふりはもう限界です。公の組織や部下の職員よりも、闇の中で、個人の利害関係を重視する。これでは「消防魂」が傷つきます。このままほっかぶりの姿勢ですませるのでしょうか。

調査報告 No.3。－あいまい答弁の追及。

＜「暴行事件」の取り下げ。誰の指示か＞ 市長(消防組合管理者)は7月消防議会の答弁で

「事件の報告を受けて▽医師に診断を求め▽警察に被害届けを出すよう消防長に指示した」と述べるとともに「その後の示談成立などは事後報告で聞いた。被害届けの取り下げの指示など一切する必要もなく、していない」と強調した。会議録の文章を読み上げる形で再確認をしたうえ次のように追及しました。

「加害者は救命士を殴って全治2週間のけがを負わせるとともに暴れまくり、窓ガラスをたたき続けるなどきわめて悪質。全国的にもまれな公務執行妨害事件。警察官も駆けつけている。本来は現行犯逮捕の事例。誰が考えても、組織として告訴することは当然のこと」です。「それがいつの間にか取り下げられ、説明も一切行われていない。▽これは組織としてのみみ消し工作。▽市長が指示しない限り不可能なこと。」と迫りました。角度を変えて再三にわたって質問し追及しましたが、市長は顔を真っ赤にしながらも「私は指示していない」と短くおうむ返しに繰り返すだけでした。

＜加害者は市長と関係の深い一族＞ 事件発生の直後は加害者の人物像は不明。それが関係

の深い利害を伴う人物だった。先の7月議会では、黙した市長に代わって、酒井消防長が、「管理者と加害者の関係は市内在住の一市民との関係、その他のことはプライバシーもあり答えることは出来ない」と述べています。今回は一步踏み込んで「加害者の身内には議員の有力者と市の幹部職員がいると聞いている。」と切り込み、「それがわかった後▽トップの指示でもみ消しの工作が展開された。▽誰もが知りながら誰もが知らないふりをする—これこそ組織を挙げての隠ぺい工作というべきでは—」と質問を重ねました。

＜釈明せず抗議もせずでいいの＞ 「私はこの問題を取り上げることに周囲からの強い圧力を感じ

ている。間違いがあれば議員の職を辞する—その自覚のもとに臨んでいる。隠ぺい工作という指摘に対し抗議でも釈明でもしてほしい」と促しました。市長は「推測とは全く違う。」と述べただけで1時間の質問時間は終わり—とても残念です。けじめをつけずにほっかぶりしてすませることができる事態でしょうか。7月議会の一般質問と答弁は全文吉川松伏消防組合のホームページ「議会会議録」に掲載されています。12月議会の議会会議録は3月消防議会前に掲載される予定です。どうぞご覧ください。

(いとう)

誰も黙っている 誰もが知っている 誰も消し

「天知る地知る」
透かせば吉川が見える

いづつ 正勝

誰も知らないと思っても、天地の神々が見ている。君と私が知っている。悪い行いは必ず露見する」。

救命士暴行事件」は許されない行為であり、誰が責任者であろうと、組織として毅然とした対応が求められるのは当然です。管理者の市長も当初は正常な感覚で、適切に判断、指示しています。しかし加害者が有力な後援者の一族であり、身近な血縁者が議会と、市役所の要職。深い利害関係。そして誰かがみ消しを働きかけたとすれば、話は別です。権力の頂点にあり、議会も役所も消防も掌中にある。もう一つの顔が、ばれなければ問題ないとのささやきがうごめいていてもおかしくはありません。加害者は事件発生の16日後に消防本部を訪ねています。多くの職員がその姿を目にしましたが、その「でん末」については、組織内で取り上げたり、説明が行われた形跡はありません。その事実の中に消防現場の苦悩ややるせない気持ちが生み出されているようにも思えます。

「岩盤」の支持層への甘ん

隠すには、いづつと同根

上からだ」。天の声だ」。あの一族だ」。誰もが知りながら誰もが黙認。追従する者も。この不思議さ。

吉川には「岩盤」がある。権力者を中心に議会、役所内部、後援会、一部業者の結託。この「岩盤」に弓を引くと、いじめにあり、懲らしめられる。これは私がかつて区長制度撤廃の運動を展開し、その経過の中で市議会で懲罰の「出席停止処分」を受けた際、吉川育ちの住民が励ましを込めて届けてくれた内容。「岩盤」の存在が実感としてよくわかります。

この事件の真相に迫ることは相当なエネルギーが必要でした。居直る幹部やびびる関係者。吉川市や議会の中核部ににらみつけられているそんな圧力さえ感じています。私の発言が事実に対していけば即、議員辞職に追い込まれることでしょう。正直に言えばある種の恐怖感は今も持続しています。

第三者の眼がない

数が力で正義の風土か

吉川には国や県の出先機関はなく大学もありません。マスコミの記事は表面的で話

題中心。多角的に物事をみる「複眼」の視線にとぼしく、第3者の眼がない「ベッドタウン」と言えます。市役所は「殿堂」。トップの権限と影響力は想像以上に大きいものがあります。土地に根差す「岩盤」、一部政党や後援会住民がこれを包んでい

ます。公益を守る立場が堅持され、議会にチェック機能があれば問題はありませんが、今回のようにトップが個人的人間関係を優先して私益に走っても、批判や当事者の反発がない限り、組織はこれを守り、従うということになりません。トップが「指示していい」と言えば、それに合わせた答弁。右へ「做うこと」の強制。それに反し、まして追及する側に協力すれば、「敵」とみなされることになります。

「白か黒か」「敵か味方か」の二分法。長制度撤廃」をめぐる議会での懲罰のときも同様でした。国政を取材し、中央の自民党を担当した私の「常識」さえ通用せず何度、懲罰のリスクにさらされたことか。最近の産婦人科クリニックの差別扱い。稲垣議員へのセクハラ騒動等々。背景は同じ構図でしょう。誰もが知りながら誰もが黙っている「地域の風土」。複眼の視線」の乏しさが浮かび上がってきます。

消防は市民の財産

「火を消し」「明朗な職場に

消防、救急。市民共有の財産」です。特殊技能の専門集団。信頼に基づく明るく元氣な職場環境が不可欠です。

公務を妨害され、負傷した仲間がヤミの中でうやむやの示談処理に。こんなことがまかり通っては使命感に燃える「消防魂」を貶め、萎えさせ、禍根を残します。けじめをつけ、早く「明朗闊達」の気風を取り戻さなければなりません。

マスコミで警察や消防の分野に精通しているOBの記者仲間をはじめ、総務省消防庁や埼玉県担当。東京、草加、三郷の消防責任者などの意見も聞きましたが、吉川の事例は▽全国的に見てもきわめて悪質▽公務執行妨害の事実上現行犯。即逮捕でも。▽組織で判断し取り組むことは当然▽管理者不在であり、「取り下げ」は理解に苦しむ。と疑問の声の続出でした。

いづつもたちも見ている

誠実に。出直して前へ

吉川の政治風土は長い時間軸の中で住民が創り上げたもの。この「救命士暴行事件」はどんな経過をたどることになるのか。子どもたちがじっと見つめています。

これは青少年健全育成大会 11/29)で栄小6年生の児童が「誠実であること」と題して訴えた主張の一部。戸張市長も最初から最後まで耳を傾けていました。

誠実は嘘や偽りのないこと」誠実であるためには弱い自分に打ち勝つ勇氣が必要」。南中3年生の女子生徒は私はスペイン人とのハーフと自己紹介した後「はじめがあっても日常の一部で、普通に見え気づかない」。見て見ぬふりして、放っている」。スペインでは信じられないと述べ、さらに「大は自分自身でいる権利がある」「はじめは人間としてあってはならぬこと、流されないで」と熱く語りかけました。感心する一方でこの事件の処理は地域の未来にとって「生きた教材」との思いを強くしました。腹を据えて。誠実に出直す。新しい年。傍観者でなく複眼の眼で!!



説明責任

トップの「逸脱」や「疑念」について指摘したり追及、釈明を求めることは難しい。庶民宰相。コンピュータつきブルドーザーと言われた「田中角栄」氏。その角栄さんに総理大臣在任中とその前後一貫して接近。終盤にはロッキード事件の担当デスクも務めた。人間味に惚れながら疑惑に迫る厳しい立場。その時の姿勢と構えは「権力の座にある者は自らそれを晴らす責任がある」ということ。この事件のマスコミの追及を契機にして「説明責任」の考え方が社会一般に広がりました。

今回の「救命士暴行事件」。組織的「隠ぺい工作」。私益優先、権力乱用とモラル欠如の指摘に、「私は指示していない」と繰り返すだけでは無責任。消防本部が「放火なのか、失火なのか。原因はなにか。消火の専門集団。手間どれば不信の火勢は一段と強まり、消防魂の士気の低下にもつながりかねない。

まず管理者である市長と当時の消防長が2人で「共同記者会見」する。▽日常の「報告・連絡・相談」。▽双方の権限と指示。▽今回の取り扱いについて率直に答えること。そこを事実確認と「信頼回復」の糸口にしてはどうか。

「民膏民脂」。市長が先に所信表明で強調した言葉。私たちの報酬・給与はすべて市民の税金で賄われている。そのことを肝に銘じて垂範すると力説。それを実行する新春「さき」がきている。(いづつ)

吉川・松伏 救急出動は3,719回 到着の時間は平均7分半 —25年度消防決算議会質疑から!



吉川、松伏消防組合の12月議会に予算規模17億7千万円余の25年度決算書が提出された。主要施策の成果・実績説明書と監査委員の審査意見書もそえて、25年度の経費負担額は吉川市が63.8%松伏町が36.1%の割合になっています。14項目の質問をしました。

<救急車の到着。全国平均より1分早く>

救急出動。25年度は3719件。前年より204件の増。119番の通報電話から現場到着までの時間は平均7分半。全国平均より1分早い。内訳は急病2305件。(60%)ついで一般負傷504件。交通事故426件。労働災害70件。自損行為44件。災害25件など。症状については軽症の割合が53.9%。前年より2.8%減ったものの全国平均を2%ほど上回る。消防本部では落ち着いて、適正に利用してほしいと呼び掛けています。

<デジタル化。交信と音声のレベルアップ>

消防救急の「デジタル無線設備」の整備が完了。総事業費2億2200万円余。移動無線の更新範囲の拡大や音声の明瞭化。災害時情報の保護や収録にも効果。

<消防職員149人。消防団員は計412人>

消防本部の庁舎内に吉川消防署。松伏には松伏消防署。それに吉川美南中央公園脇に美南分署。職員は本部長以下149人。27年度一人増員で150人体制に。24時間交代の勤務。女性職員は3人。消防団員は吉川市だけで条例定数320人。実数306人(26/4)。若干の報酬、被服貸与など。25年度での運営総事業費は1千890万円余。災害時の出動。訓練。交通整理や鎮火見守り。近年は自主防災や自治会の消火救急講習会への参加と指導。女性団員19人は幼児やお年寄りを対象に避難や予防の指導にも活躍。20代は全体の2.3%。若者の参加は大歓迎。

<消防団を地区防災の中核に>

国会は先に議員立法で消防団を地域(地区)防災の中核に位置づけ、ハード・ソフトの両面で支援を強化することに。吉川は13分団の体制。25年度は第8分団(中曽根)の機械器具置き場整備。(1千2百万円余)次は第5分団(きよみ野・本吉川)を予定。

<消防庁舎は緊急時に吉川市災害対策本部にも>

吉川市の現庁舎は老朽化。大災害の場合機能しないことも。市では消防本部庁舎の3階会議室を緊急時の災害対策本部として活用の方針。電話回線の拡充。インターネット回線の整備。市の代表電話の移設や関係機関との受発信などができるよう通信・連絡システムの整備。空調、自家発電、非常用水などについても見直し、整備も。実践的訓練と検証で万全の備えができるよう継続的に働きかけていきます。

編集後記

組織的隠ぺい、もみ消し工作があった」との指摘に対し、推測とは全く違う」と示談成立は事後報告で聞いた。被害届の取下げ指示はしていない」と市長は答弁。また、当時の総務課長は、加害者が謝罪に訪れ、示談の話があった。被害者(救命士)に話したところ、示談を了承し、罰を望まない」と言った。消防長にも報告し、告訴を取下げることとなった」と。

そうであれば、消防長が「管理者」へ報告、相談もせず、その日のうちに吉川警察署へ、告訴の取下げに行かせたことになる。

示談や取り下げに至る経過、誰が判断、指示したのかについて、管理者である市長は明確に答えず、説明をしない。

なぜ、推測とは全く違う」と繰り返すだけなのか。トップとして、納得できる説明が求められている、と痛感した。傍聴人は私一人だった。(いながき)